

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

065

20.MARCH
2002

特集
JUDI 若手が遭遇している都市環境デザイン

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集 : JUDI 若手が遭遇している都市環境デザイン	1
1. 浜寺の松	2
2. 思いの棚からひとつかみ	3
3. 新たな可能性を与えられた近代建築	4
4. 南船場における船場後退空間の可能性	5
5. 「面白い」デザインが 「面白い」ように実現	8
6. 「城巽五彩の会」のことなど	9
7. ITSの進展に見るまちづくりのこれから	11
8. 都市環境デザインを市民感覚で	12
9. 金沢の町型再考と路面電車再生へのみちす じ	15
10. 都市に息づく「ワンニヤンの景」	16
11. 時代はカスタマイズ	17
12. ようやく C G が土木分野に定着	18
13. 小さな子供も共存できる街	19
14. 学生レポート—森川さんを訪ねて	19
15. 学生レポート—鳥越けい子さんを訪ねて	22
●選挙管理委員会役員選挙結果報告	23

特集 : JUDI 若手が遭遇している都市環境デザイン

いろいろな立場で、都市環境デザインに関わっている都市環境デザイン会議若手メンバーが、(若手と言っても30、40歳台ですが、)自分自身がかかわったことあるいは、彼ら自身の身近で起こっている事で、都市環境デザインという視点で興味深かったことや日頃思っていることを語っていただきました。

時代の流れの中で、変化していったこと、また、変わらないものなど 2002 年都市環境デザインが、今どこにいるのかこれからどこに行くのかをメンバーの考えを元に皆さんで議論できればと思っています。

特集

1

浜寺の松

小浦 久子

KOURA HISAKO

大阪大学

南海浜寺公園駅の東側に、最も早く大阪の郊外住宅地として開発された住宅地がある。阪神間よりも早く、大阪の豊かな商人や財界人が移り住んだところである。大きな敷地にゆったりした庭をもった洋館や和館が建てられた。時間の流れのなかで、建て替えが進み、随分変わってしまったが、それでも当時の面影が残る。

そのなかにヴォーリス設計の洋館・近江岸家がある。その庭には松が植えられている。この住宅地の庭には松が多い。浜寺地区の通り景観の調査をして、わかったことは、庭のある敷地の半分には松があり、その松は洋館にも和館にも、漆喰と板塀がまわる近代和風住宅にも似合っているということだった。

ここに松は、潮風に耐え、時間に耐えてどっしりと広がる枝振りではなく、すくすくと育っており、枝の刈り込みのかたちも結構モダンなのだ。花鳥風月の絵に現れる松の姿や日本庭園に見られる松とちょっと違う。近江岸さんの庭は芝生で小さなプールもあるけれど、塀際には松が並ぶ。住宅は洋風だが、2階の和室のあるところは窓の感じが和風になっている。間接照明やフラットの床、機能的なレイアウトが気に入つ

ているとおっしゃっておられるように、建物は全く洋風の空間ではあるものの、松と一緒に土地の風景をつくっている。海に近く、明るい空気とちょっと湿っているよう

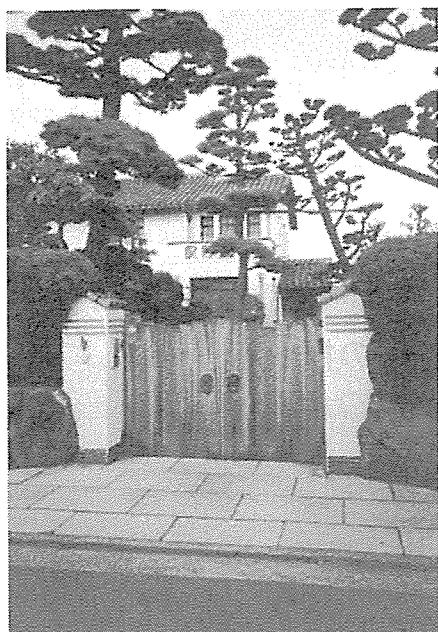


写真1 ヴォーリスと松

まっすぐにのびた幹に小さな緑のかたまりに刈り込まれた松が洋館にも似合う

思いの棚から ひとつかみ

外園 勝
SOTOZONO MASARU

(有)Soto 設景室

で乾いた気分の土地柄に、洋館と松。

なぜ浜寺の調査をしたかというと、建物が建て変わっても、風景や場所性の持続は可能なのだろうかという問題意識からだった。堺の文化財課の小林さんと真夏の暑さのなか、洋館や和館、当時の先進的な提案住宅が残る一方で建て替えが進む浜寺や大美野の郊外住宅地、戦災でも焼け残った近世の面影を残す旧市街のまち、せっかく整備した街道沿いにあるきれいな民家の一角がアパートに変えられていく風景、ミニ開発やプレファブに囲まれてしまった民家など、歩き回った結果、考えたことだった。

浜寺地区も最近、建て替えが進み、風景が変化しつつある。そのなかで登録文化財や近代和風の住宅を残していくというときに、建物だけが残っても意味があるのだろうか。その場所の環境と呼応しながら、それらの建物がつくってきた風景のなかにすることで、その建物の意味が生きるのでないだろうか。最近、ようやくモノに価値を見いだす文化財の立場と、環境や生活の表現としての街並みや地域性の整備が連携するようになってきた。多くの普通の建物があってこそ、地域の光や色や空気があってこそ、建築は文化になる。守るとは、手を入れ続けることであり、つくりつづけることであり、生き続けることである。

そこで、浜寺の松である。とても人工的であるけれど、その場所の固有性を示すという意味において、とてもヴァナキュラーなのもある。まちなかでも、住宅地でも、混在地でも、都市的な場所性が表現されてくるには、時間がかかる。浜寺の松を発見しながら、そうした時間をかけた固有の都市的表現の楽しさやおもしろさをもっとわかりやすく発信していくことも大事だと思った。建築に人々が閉じこめられる前に、まちの楽しみを探すこと。そうすれば、建

築ジャーナリズムも、少しは敷地のある通りや街区、まちの情報を扱う必要を感じるようになるだろう。敷地は自立して自閉して存在するものではない。

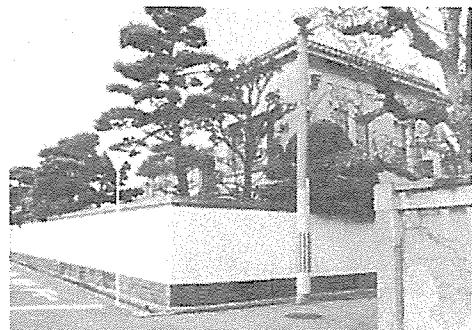


写真2 洋館と松

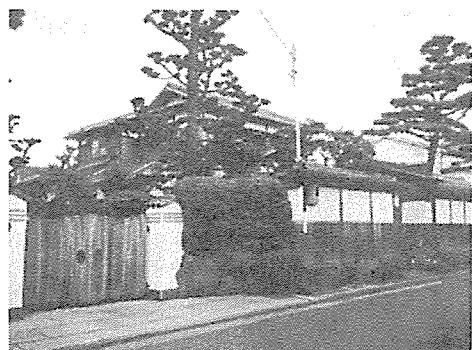


写真3 和風の敷き際



写真4 すこし姿が違うが...

建て替えられると建ぺい率が高くなり、駐車スペースが敷き際に現れる。それでも門構えには松がある

ンティア的に有志が集まって動き始めました。では何故、ずっと、付き合っても良いと思うまでに惹き付けられたのでしょうか？私は、そこに魅力的な目標の威力を感じています。

まず、この活動の目標はとにかくわかりやすい。車の道はネットワークされていても、歩ける道は分断されてたり、不足しています。それが人の多い都市部ではなさらです。今満たされないものを創造し、それは、これから社会でも重要性の高いものと信じることができます。そして、完成した絵姿が容易に目に浮かぶ。このわかりや

すきに惹かれます。

次に、計画が壮大です。草の根的活動から始めて、これが実現されるにはどのくらいの時間が必要なのだろう。まあ、2、30年は必要では？いや、ひょっとしたら、生きてるうちは無理かも、いやいや逆にどこかで加速度が増して、もっと早く実現可能かもと、話しが大きければ想像の時間軸も大きく振れます。そう、大きく振れても、目標がわかりやすいから、つい出来そうな気になり元に戻ってきます。

この「わかりやすく」と「壮大」を掛け合せた目標こそが私を惹きつけます。魅せられた私は、会う人毎にこのことを口にし、喋っていると、また一層気になります。これって、恋愛みたいなもん？

2. 目標無き国

そう、目標は人のヤル気の接着剤になるもの。現に、私達の活動にも老若男女、立場も様々な人が集まっています。ところが、今の日本には、この閉塞した状況を打破するのに不可欠とも言える、恋する目標がありません。改革をしようとしているのに。政府の進める、財政構造改革は重要なことです。しかし、改革の対象が大きいほど目標の「わかりやすさ」「壮大さ」で人の心を掴み、大きな活力を生み出さなければ。構造改革を言うのなら、政府にも是非そんな目標を提示してもらいたいものです。

「21世紀型の～～を目指します」ってな気の抜けたものでなく、「30年後には、全ての介護費用がタダになります」とか、「50年後には全ての川で泳げるようになります」とか、具体的な姿が目に浮かぶものを挙げて欲しいものです。極端に言えば、お題目は大きければ何でもいい。川だって、泳げるようによしとすれば河川部局だけの話では絶対に済まないし、ましてやそれを全部とか言えば、もう、日本のほとんどの機関が手をつないで取り組まないと無理でしょう。改革ってそうやってみんなで取り組むこと。そして、国民に選ばれし政治家の仕事はそんな目標を立てること。漏れ穴に糸割糸を貼り付けるような法律作つててどうする。昔の「所得倍増計画」なんて、その内容はともかくとして、言葉の響きでググッとくるもんがあるもんなあ。

3. 目標を立ててみれば

目標って口にするとやる気が出てきます。不言実行という言葉もあるけど、私の好みは有言実行。多数で取り組むことであればなおさらです。それなら、この会議でも打ち出して見ると面白いのでは。例えば、日本にとってのメモリアル・イヤーに因んで、「都市環境デザイン会議では、28年後の

サッカーワールドカップ（W杯）で日本代表を優勝させます」ってのはどうでしょう？W杯って2,3回出ただけで優勝できるものではないはずですから。みんなが注目し胸躍らせる目標を口に出してみて、それを実現するための手段を探っていくのも悪いことではないはずです。経過は想像にくくても、優勝した選手や国民の歓喜の姿は容易に目に浮かびます。スポーツ関係の人々と共に、W杯で優勝できる都市環境を考え、デザインして行くのも有りではな

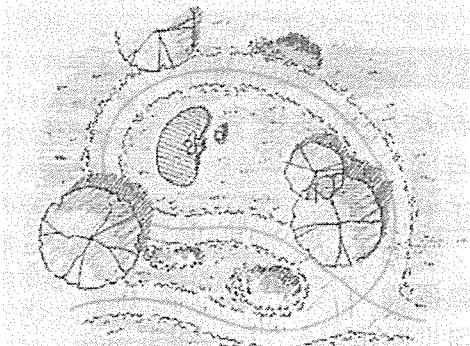


図1 コミュニティの赤い糸

「コミュニティの赤い糸」は、中低層住宅間を回遊する、変化に富んだ一筆書きの小道である。赤い糸のねじれやよじれは、遊び、休憩、園芸等のための様々なスペースをつくりだし、住民のコミュニティを柔らかく結びつけるだろう。



図2 麻耶シーサイドプレイス
高層マンション間の中庭には、住民参加を見越した緑化スペースが、地植え、プランター、レイズドベッド等と形を変えながら風景に溶け込むように配置されている。はやくも、住民、管理・運営者、開発者の協力の元、住民自身の手による、マンション共有スペースの樹木草花管理が始動した。



図3 OBPビオトープ
ビジネス街の人口地盤上に設けられた、孤立したビオトープでの生物相にはおのずと限界がある。しかし、均質な都市空間の中で表れるいきものの持つ荒涼さと合わせて、その存在価値を信じる。

いですか。建築とランドスケープのコラボレーションとか言って、親戚同士でありがたがってないで、一見無関係そうでもどこかで繋がっていたタウンページのCMみたいな関係を見ている方が、みんな楽しいと思うけど。そして、こうでもしないと縦割り弊害の消滅や、本当の横断的な連携みたいなのって今の日本じゃ不可能と違う？

4. 目標の先に

今、私が心を突き動かされるものは何

か？不平や、不満、あらゆる欲求もその要素ではあるが、やはり、わかりやすく壮大な目標の先にある、「こうなったら、もっとおもろいのに！！」ってことみたいです。それって、今の世の中にも絶対に必要だけど、確実に欠けているものもあると思うがいかがでしょうか？

最後になりましたが、皆様、ご一読ありがとうございました。

特集

3

新たな可能性を与えた近代建築

篠原祥

SHINOHARA YASUSHI

大阪ガス(株)

3年前から大阪の都心である「船場」の研究に関わっている。船場にはさまざまな都市機能の歴史的集積（ストック）と活発な都市活動（フロー）があり、それらが融合し、活動の拠点として、心地よいスペースとして、都市の景観として、生かされている場所がある。その中で私が特に興味をもっていること、おもしろいと感じていることは、近代建築に新たな要素が加えられて、都市の中で新しい役割を担って生まれ変わっていく場面である。

私が始めて近代建築を身近に感じたのは、20年前に訪れた芦屋の「旧山邑邸」である。その当時、私は大学の構造系の研究室で鉄骨構造を専攻していた。その研究室では研究活動の一つとして、老朽化した近代建築を現代の建築構造技術を用いて再生する研究に取り組んでおり、私が研究室に入って間もない頃、F.L.ライト設計の「旧山邑邸」の耐震診断をおこなうことになった。恥かしながら「旧山邑邸」という名前をその時初めて聞いた私は（さすがにF.L.ライトは知っていたが）、最初は耐震診断のことだけを考えていたようだ。ところが現地を訪れて、その建築が持つ魅力、奥深さに魅了された。特に2階の応接室にあるバルコニーからの芦屋市街、大阪湾を一望できる眺望は今でも思い出せるほど私の目に焼き付いて離れなかった。そして歴史が刻み込まれた空間の持つ魅力、酒造会社オーナーの別邸として建設された建築が企業の迎賓館として再生されていることのおもしろさを実感した。

話を現在の都市に戻すと、大阪の都心・船場にはその歴史を物語る近代建築が残っている。構造面あるいは機能面での老朽化により取り壊されて建替えられていくものも多いが、今も当時の姿で都心の景観の重要な要素をなっているものもある。その近代建築は保存されているのではなく、使われていることが重要と考える。建設当時の用途のまま使われ続けていることもしば

らしいことであるが、現在のニーズにマッチした新しい機能が付加されて、生まれ変わっていくことに私は興味がある。船場には、そのように新たな用途として利用されている近代建築がある。

写真1は地下鉄北浜駅近くの堺筋沿いにあるビルである。もとは報徳銀行という銀行であったが昭和初期に現オーナーが取得し、戦災や建替えの危機を乗り越えて80年経った現在も建設当時の姿をとどめている。その1、2階に数年前にレストランが入店した。もと銀行の営業室であった吹き抜け空間がレストラン空間として生まれ変わったのだ。



写真1

そこから堺筋を100mほど南へ下がったところに写真2のビルがある。このビルは昭和2年に安井武雄氏の設計によりできた事務所ビルである。1年前に1階にレストランが入店し、まちに新しい景観をつくりだし、まちで暮らすオフィスワーカーた

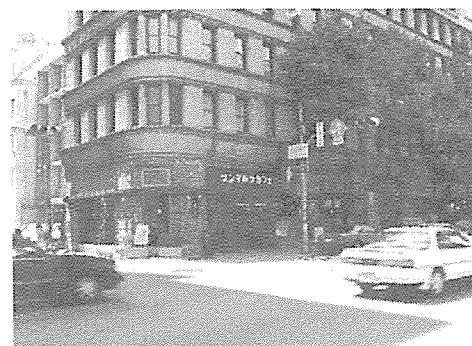
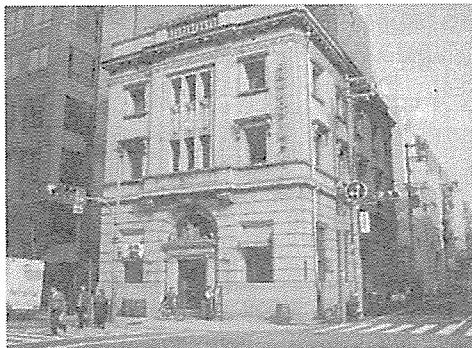


写真2

ちに安らぎの場を提供している。

さらに堺筋を南へ下がった南船場、順慶町との交差点に、私が特に興味を持っている近代建築（写真3）がある。川崎貯蓄銀行として昭和6年に完成したこの建物は、4年前まで銀行の店舗として利用されていたが、オーナーである銀行の経営破たんにより競売に出されていた。その建築にほれ込んだ実業家が、以前から企画していたレストラン経営を実現させるために、競売で所有者となった企業の社長との直談判により企画を現実のものにしたのである。昨年11月にオープンしたそのレストランは、もと銀行の営業室であった3層吹き抜けの贅沢な空間をみごとに生まれ変わせており、また金庫室もワインセラーや会員専用の個室としてうまく活用されている。

近代建築が新たな用途で使い続けられることは、都市にとって大きな意義があると思う。まずその建築がもつ歴史そのものが生み出すほかにない魅力が、今後も積み重ねられていくということに意味がある。次に歴史を積み重ねた空間を持つ、同じもの



を新しく作るのとは全く違う重みが受け継がれることも重要な点である。また大正から昭和初期の豊かな文化を背景に実現した、贅沢な空間や繊細なファサードも、都市の個性の発揮に重要な役割を果たしている。さらに銀行やオフィスであった建築が、広く一般市民が利用するレストランなどの空間へ生まれ変わることにより、その魅力の波及にもつながっていくと考えられる。

近代建築再生のサクセストーリーともいえる事例を紹介したが、一方で建て替えのために取り壊される近代建築も多い。その意義が広く市民やデベロッパーに理解され、建て替えではなくリニューアルされることを願う。

最近、三休橋筋沿いにあるレンガ造りのビル（大阪教育生命保険のオフィスとして明治45年に建設された建物。写真4）に入居していた証券会社が転出し、現在空き家になっている。幸い建て替えることなく新しいテナントを探しているようだ。ここはどのように変わるので、期待したい。



特集

4

南船場における 船場後退空間の 可能性

岸田 文夫

KISIDA HUMIO

株竹中工務店

私は昼食や飲み会で南船場4丁目界隈を訪れることが多い。そこで最近気になっているのが、船場建築線による後退空間を店舗の外構としてうまく利活用している事例が増えていることである。この空間が南船場らしい魅力を醸し出しているひとつの要素ではないかと思う。

1. 南船場4丁目での用途転換の実態

図1～4は1996年から2002年にかけての南船場4丁目の1階における物販、飲食などの商業用途の増加を調査したものである。当初この地区にはほとんど店舗はなかったが、96年以後、横堀筋沿いと順慶町で本格的に店舗化がはじまり、98年から2000年にかけてその変化は加速していく。そして2000年以降は若干落ち着い

てきたようであるが、面的な広がりを見せている。

街の変化は大変早く、商業用途への転換のみならず、店舗の入れ替わりも激しい。そのため、将来のまちづくりについて、家賃の高騰や繁華街化、風紀の悪化といった不安も感じられる。

2. 船場建築線とは

船場は古くから市街地が形成された地区であるため、現在多くの道路が幅員約6mおよび8mしかない。船場建築線は昭和14年4月に指定されたもので、南北方向の道路については、その中心より5m、東西方向の道路については6m後退した位置にあり、現在はこれを道路境界線とみなしている。道路斜線や容積率などの制限には

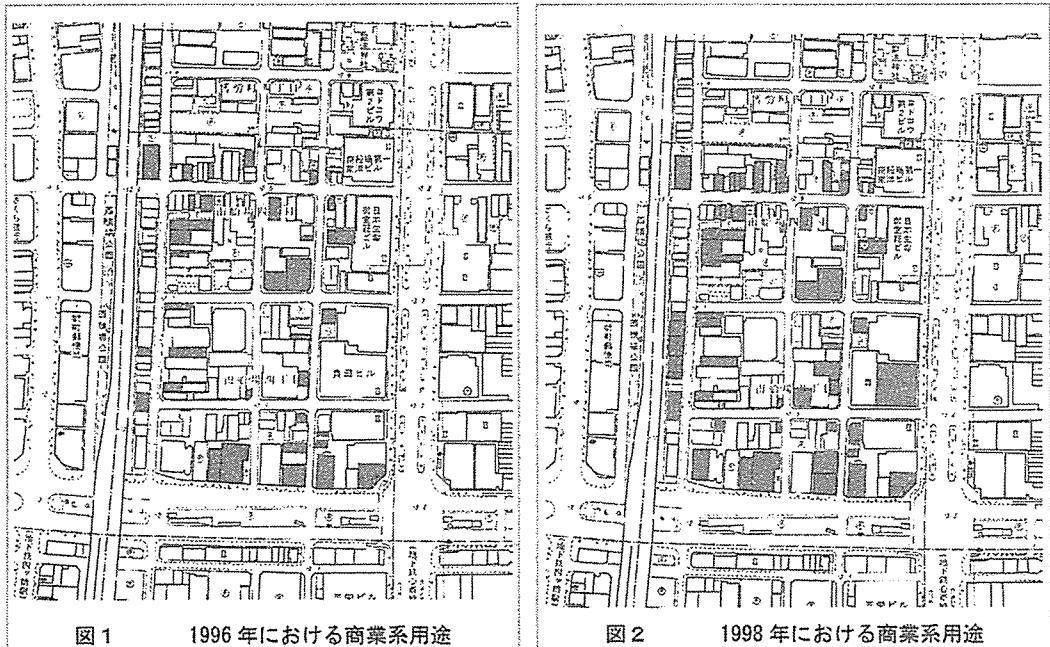


図1 1996年における商業系用途

図2 1998年における商業系用途



図3 2000年における商業系用途

図4 2002年における商業系用途

道路幅員が基準になっているため、現在の道路幅員のままでは 600% の指定容積率を確保できなかったり、4 階から道路斜線による後退が必要になったりするのが、この船場建築線によって大幅に緩和されている。また将来、建物の建替えが進めば、歩道空間が確保されることも期待されていると思われる。ただし、この船場建築線は土地の所有権とは関係がなく、生み出された後退空間が必ずしも公共的な空間としては機能していない。

3. 船場後退空間の利活用の実態

隣接するアメリカ村には船場建築線の指定はなく、歩道の有無や立て看板の多さも合わせて、かなり混雑した印象を受けるが、船場建築線のある南船場の街並みには若干のゆとりが感じられる。しかしながら、船場後退空間が期待されている歩道空間とし

て機能している例（写真1）は少ないのが実情である。その多くが連続性を持っていなかったりするのであるが、南船場で特に特徴的なのは、船場後退空間が店舗の一部として積極的に活用されている事例である。例えば、テラコッタタイルやピンコロ石、ウッドデッキなどを用いて店舗ファサードと一体的な舗装、デザインをしている例（写真2、3）や店舗のエントランス空間として演出している例（写真4）などが見られ、さらにはオープンカフェとしている所（写真5）や商品を陳列する店舗空間の一部としている所までもある。こうした事例からは特別悪い印象は受けない。しかし、これも度が過ぎて、屋根をつけたり、埠で囲んだりして公共性を失ってしまったり（写真6）、建物を建ててしまっている（写真7）ものもあるのは少々問題だと感じる。

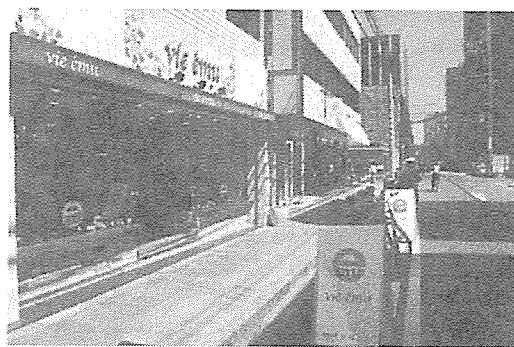


写真1 歩道として機能している例

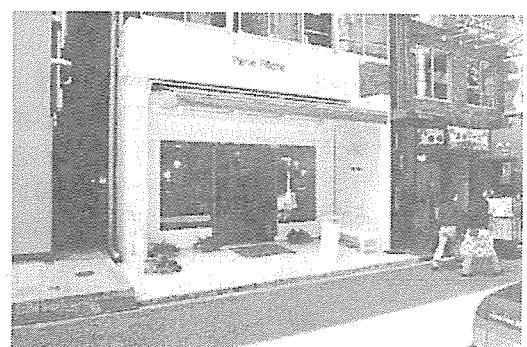


写真4 店舗エントランスとして一体的に演出している例



写真2 店舗に合わせて舗装をデザインした例①



写真5 オープンカフェとして利用している例

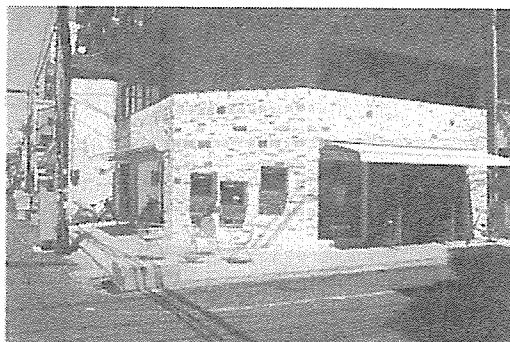


写真3 店舗に合わせて舗装をデザインして例②

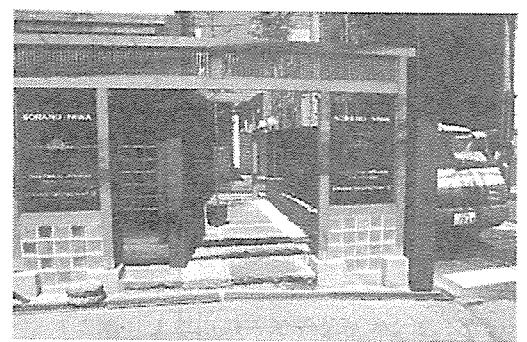


写真6 堀で囲んで占有化してしまった例

4. 船場後退空間に思うこと

船場後退空間は土地の所有権が民間であり、求められている機能は道路の一部とされている曖昧さがある。同じような性格の空間としては公開空地があるが、公開空地は総合設計制度の中で空間のしつらえや管理、許される行為などについてのルールが定められており、例えば、オープンカフェなどの営業行為は禁止されている。南船場で見られるオープンカフェや店舗の外構としての環境デザインは、これまでの公共的な空地では認められにくいものであり、船場後退の曖昧さが生み出した大きな魅力であるとも言え、これが「南船場らしさ」を創り出すひとつともなっているのではないかと感じる。私はこれらを積極的に評価したい。と同時に乱用されることのないよう、

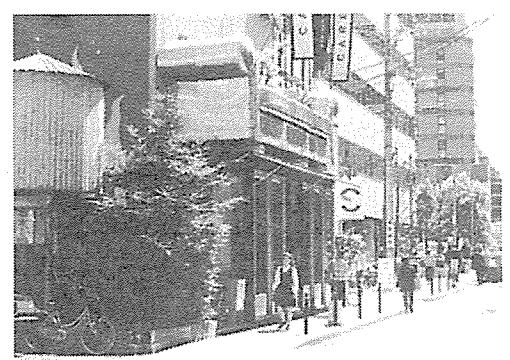


写真7 建物で占有化してしまった例

実態に応じたガイドラインがほしいとも思っている。

南船場で見られる船場後退空間の活用方法が、今後の公開空地の魅力アップを検討する手本にならないものかと思う。

「面白い」デザインが「面白い」ように実現

堤 肇

TUTUMI HAJIME

鳳コンサルタント株

はたして都市環境デザインにとって面白いこととはどんなことか。そこで"面白い"を辞書で引いてみると、・楽しい、愉快・興味深い・おかしい、滑稽・好ましい・風流、趣がある・景色などが広々とし気分が晴れることなど案外景観に関する意味が含まれていることを発見。ここでは最近私が関わったプロジェクトで、面白い（環境デザイン的に好ましい）ことが、面白い（おかしい）ように実現した事例を紹介いたします。

1. 街開き・モデル街区という名のもとに

関西地域での某ビックプロジェクトにおいて戸建て住宅地の基本設計に際し、面白いデザインを色々と組み込むことができた。これは本街区が、このビックプロジェクトの街開き地区におけるモデル地区に位置づけられているためである。一般的なグリッドパターン住宅地ではなかなか見られない以下のようなデザインの提案が、モデル街区という名のもとに、面白いように次々と決まっていった。（図-1. マスターplan）例えば、

- ・植栽帯とサクラ並木のボンエルフ道路で、地区のシンボルとなる緑の軸を形成
- ・街区道路は、歩くにつれ景色が変わるゆるやかな曲線道路
- ・交差点部は化粧舗装とするとともに、実の生る木を植栽し、辻ひろば化（ヒメリングの辻、スモモの辻など）

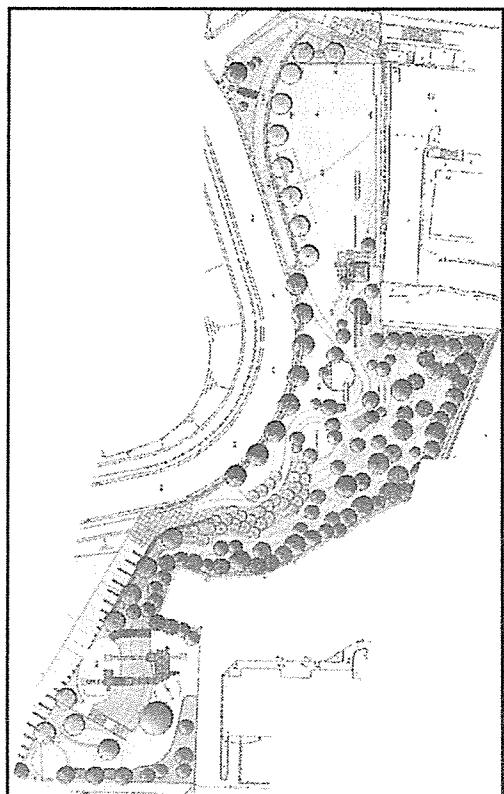


図-1. マスターplan

- ・道路両側約1mづつを、インターロッキングなどによる化粧舗装とすることで、ヒューマンスケールのみちとし（みかけの車道幅員が狭くなる）、車のための道から人のためのみちへ

- ・道路排水をL型または皿形側溝とすることで（一般的にはU型）、住宅地の植栽をみちに滲み出させ、やわらかい道際空間を創出

- ・全線地中化による無電中化

- ・一部現況林を保存し、現況林付き宅地に
- ・地形の高低差を斜面住宅地として解消などなど公共整備としてできるあらゆる面白いことができた。

2. 住民パワーの威力

大阪の吹田市で、7回のワークショップの末、住民と一緒に街区公園の基本設計をまとめた。（図-2.マスターplan、模型写真）

市で初めてのワークショップ形式という注目度が高いということも幸いし、管理者協議の際、通常ではなかなか許可されないような面白いことが「住民の意向」ということで面白いように認められた。

いくつかの例を以下に紹介します。

- ・斜面地も緑の遊び場に

- ←土砂流出防止のため、斜面は側溝またはしがらの処理が求められたが、斜面も下にひろがる広場と一体の遊び場としたいという趣旨から、所々に泥溜めとなるような低

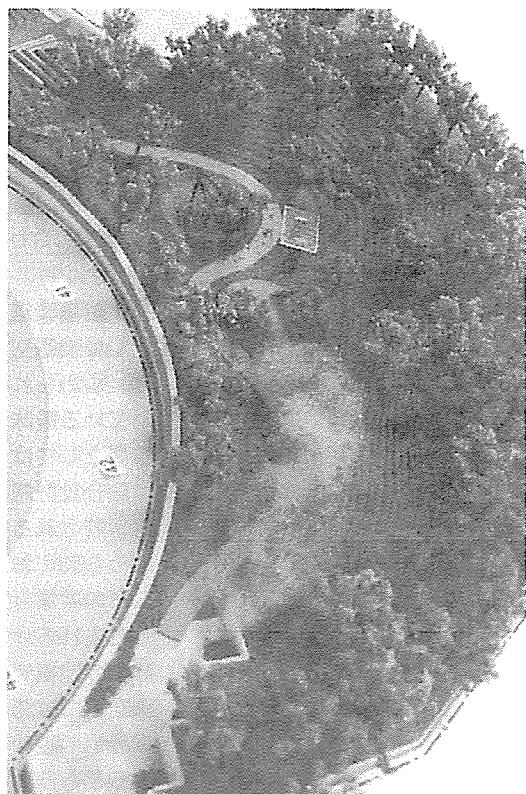


図-2. マスターplan、模型写真

「城巽五彩の会」 のことなど

中村 伸之

NAKAMURA NOBUYUKI

(有)ランドデザイン

木植栽帯を設けるだけで対応し、遊び場としての機能を持たせられた。

・雑草いっぱいの原っぱ

←芝生の広場は踏み荒らされ、すぐ禿げてしまつたため問題が多いとの指摘を受けた。しかし、むしろ住民たちは年月の経過とともに雑草あり、禿げ地ありの昔ながらの原っぱ感覚になることを求めているということで認められた。

・サクラの広場

←虫等の問題が多く、管理上サクラは植えられないことが多い。ここでは、広場の周りを全てサクラとすることで地区の名所とし、地域コミュニティのシンボルの場としたいということで説得した。

「この公園は、やたらと景観・環境とこだわるが、そんなことより管理上・利用上で問題が無いことが1番。」というコメント。

ここまで明言できれば、管理者としてはそれはそれなりに面白いことかも・・・。今はさらにワークショップを続け、公園完成後の管理運営も住民で行うような方向で進んでいます。デザインのみならず、利用上でも面白い公園になると信じています。

これら2つの事例はそれぞれ特別の理由のため、比較的スムーズに面白いことが可能となったケースです。しかし、管理上・コスト上・施工性などから環境デザインがないがしろにされていることの方がまだまだ多いのではないだろうか。この点は全く面白くない。

少しの工夫と努力で、これらを乗り越え環境デザインとして面白い事ができる余地はまだまだあるはず。そんな取り組みを続けていきたい。

のまち」であることも引っ掛けた。

1. 五彩の茶会

2000年11月。「歩いて暮らせるまちづくり」の一環として都心部一帯で「まちなかを歩く日」というイベント・交通実験が開催された。

五彩の会でも学区内の5ヶ所でイベントをした。メインストリートである御池通シンボルロード、二条城に面した2つのホテル、2ヶ所の神社である。屋外でのコンサート、ダンス、講演会、手づくり市など様々な催しと共に、100円から300円でお茶のセットが楽しめるという企画でのべ1300人以上の方にチケットを使っていただいた。(学区の世帯数は2000弱である) 正統なるオドロオドロシイ街頭紙芝居を継承する古橋理絵嬢は、迫力のある演技で子供たちをトリコにし、路上から生まれた芸能の力が確認できた。(写真1)

御池通の使用許可に当たっては、京都府警から「露天商が進出する口実にならないように、違いを明らかにすべし」と指導を受けた。警察にとっては「露天商」も「市民」もたいした差はないだろうし、「露天商」なる存在をアウトサイダーとして排除する、「無色透明で清潔な」コミュニティしか語れないならば、イメージが貧困。聖と俗が紡ぎ出した、伝統ある京都の文化も危うい。そんな事を気にも掛けずに、踊りの列は通りにあふれる。(写真2)

2. 「明日の堀川を考える」展

都心を流れる堀川は、水運や染色に関わる利水などでこの地域を支えつけた。近

年の都市開発で水流は枯れたが、新たな水源を探して、復活させる機運が市民の間から生まれ、市を動かすに至った。（これは市民参加・環境再生型の公共事業として、注目されるべきだが、また別の機会に詳述したい。）

立命館大学と宝塚造形芸術大学の環境デザインの授業で、「堀川の再生をきっかけとしたまちづくりへの提案」という課題を出したところ、思いがけずすばらしい作品が集った。それを自治会館に展示する2日間の展覧会を行なった。（写真3）来場者による投票や、小・中学生を含む審査委員によって、賞が決まり、授賞式が行なわれた。（写真4 内海彰子さんの最優秀賞作品）

3. 水と緑の城巽

「第3回世界水フォーラム」への参加のオファーもあり、今年のテーマは「水と緑の城巽」だなんて盛り上がっていたところ、会長のSさんがオーナーとして建設中の学生マンションに、緑がほしいとの相談があった。早速、オープンスペースのレイアウトの変更を提案し、小さな緑が連続する露地のような空間とソヨゴのシンボルツリーが生まれた。特別の事をしたわけではないが、ちょっとのやる気と身近なアドバイザーがいれば、まちに緑は増えてゆくのである。（写真5）これが、良い前例になれば嬉しいのだが。

会の存在と姿勢をアピールするために「今年は水と緑について考えます」というポスターを作成して、学区内に張り出すこととなった。（印刷屋のMさんが何でもタダで刷ってくれる）5月には、堀川の水源を探訪するツアーを行なう。新たな観光資源やコミュニティビジネスの可能性も同時に検証する事になるだろう。

また、11月の15～17日には「まちなかを歩く日」が実施されるが、「まちなかの水と緑を訪ねるツアー」などを検討中である。とておきの「聖域」を見られるかもしれないでの、乞うご期待。

また、3年目になる「都市環境を部分から改変する」という上野 泰氏のセミナー（JUDI関西ブロック主催）でも、当地区を舞台として地元の若者も参加して「百年後の城巽をデザインする」ワークショップを準備中である。成果は9月のJUDIセミナーでお披露目をするで、是非お越しいただきたい。



写真1



写真2



写真3



写真4

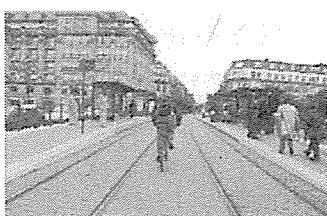


写真5

ITSの進展に 見るまちづくり のこれから

藤川 敏行
FUJIKAWA TOSHIYUKI

竹中工務店



ITS という言葉を最近良く聞くようになった。ITS とは INTELLIGENT TRANSPORTATION SYSTEMS の略で、高度交通システムと訳される。渋滞を緩和し、地球環境に寄与するとか、安全性・利便性を高めることなどを狙っている。一例として、車に乗る人ならテレビなどでも良く見るはずの ETC が分かりやすいと思う。高速道路の料金所で停止しなくともバスできるあれである。これも ITS のひとつのかたちではあるのだが、車に乗る人で ETC を利用している人はまだ数パーセント、高速を利用する車の中でも 3% 程度と言うところである。ETC の普及が進まないのはいろいろと理由はあるようで車載機が高価であるとか、ETC 専用レンがまだまだ少ないとか、ETC を利用することによる金銭的メリットが感じられないとか。しかし、ETC だけでなく ITS 全体への取り組みが日本でなかなか進まないのにはきっと別の理由がある、と最近感じている。日本はとかく技術先行型であり、ITS を取り巻く各種技術も世界随一と言われている。ちなみにカーナビゲーションの普及率はダンツの世界一である。にもかかわらず、まちづくりの視点から言えば ITS 後進国なのはなぜなのか？ITS の先進事例としてフランスのストラスブール市がしばしば取り上げられる。世界各国から ITS 関連の視察が盛んで、私もある関連団体の活動としてストラスブールに視察に行く機会があった。このまちは、汚染された大気を浄化しまちを蘇らせるために、LRT と呼ばれる路面電車を敷設し、渋滞を緩和するためまちなかから一部を除き完全に車を排除してしまったのだ。しかも、LRT の敷設は市民の共同事業という意味合いから、支払賃金に交通税を課し実現されたのである。中心市街地から車を排除することは、構想としてはあっても日本ではなかなか実現できそうに無い。商業・業務・サービス施設などが車を中心に考えられているし、車での活動が当たり前になっているからだ。車を排除するなんてことをしたら商売が成り立たない、ショッピングするほうも反対意見が多く出そうだ。まして、自分たちの賃金を事業に充てるとなれば。しかし、ストラスブールでは車を排除したことによって逆にまちなかに人・商店街の賑やかさが戻り、高級ブランドショップの誘致に成功している。バスの利用自体は減ったにもかかわらず、全体の交通機関利用率はむしろ増加したという。車に代わり、まちなかを自転車がとても気持ち良さそうにしかも安全に走

っている。人もしかりだ。そして圏域全体の再生につながっているのだ。これは単なる環境再生だけでなく、地域文化の再生にも及んでいる。文化の復興は教育振興にも影響を与え、ストラスブールでは実際に市民の 5 人にひとりが学生と言うし、この動きに合わせて、フランス国立行政学院など教育機関や国際機関も引き寄せられているのである。

日本でも LRT による車の排除、公共交通機関による移動の奨励などについて議論し、実現に向け取り組みを始めているようだが、ついで ITS の技術的・表面的なところだけをなぞっていて地域文化などの本質を見失っているような気がしてならない。要するに、日本はどちらかといえば、欧州型ではなくアメリカ型の経済成長の持続性を目指しているところがある。言うなれば市場原理に基づく都市再生である。しかし、欧州の事例を見るにつけ、いまさらのように欧州型の都市再生に学ぶことが多いと感じるのだ。

と、ここまで話しへ進めると、なんだかぼんやりと日本のまちづくりの混沌とした状況の理由が分かったような気がしませんか？でも、欧州型の都市再生に学ぼうとして、いろいろと考えてみても、実は理由はもっと単純なような気がします。日本では ITS 推進の総論については賛成でもまちから車を排除するとなると自分のまちだけはいや、となります。緑にもよく似た話があって、近くに緑豊かな公園・街路樹の並木をつくるのはいいけど、自分の家の前はいや、というものです。落ち葉が落ちたり虫がくるのが気にいらないらしく、この手の話はよくあるらしいのです。混んでる道では自転車と歩行者がわれ先にと道を急ぐ。ストラスブールでは、先の路面電車は自転車持ち込み OK で、たとえ混んでいても皆文句も言わずに譲り合っています。空気をきれいにするために緑を植えるくらいのことは言わずもがなでしょう。つまり、日本との決定的な違いはひとりひとりの人間の考え方の積み重ねにあるような気がしてならないのです。でも悲観することはありません。今の若い人を見ていると、以外と生活リズムが緩やかだったり、自転車で身軽に移動、だったり。落ち葉の問題なんかちっとも（いい意味で）気にしていない様に思えます。ナチュラルな感じがします。日本のまちづくり・都市再生もまだまだ捨てたもんじゃない。近い将来、自然とゆっくりと動き出すような気がします。

都市環境デザインを市民感覚で…

(まちづくり補助事業における都市環境デザインのあり方を考える)

岡部 茂高
OKABE SHIGETAKA

(有)アジアプラン

某県某市によるまちづくり補助事業（まちづくり総合支援事業）における都市環境デザインのあり方について紹介します。

1. 事業内容

事業内容は、地区の中心市街地の活性化について、地元の意見を集約し、住民参加型のまちづくり計画（案）を作成したうえ、まちづくり総合支援事業を導入するための“まちづくり事業計画”を策定することを目的としている。地区の施設整備メニューは、駅前広場、駅広から延びる都市計画道路、歩行者専用道路、公園・多目的広場である。

2. 住民合意形成活動の推進

平成13年度における住民合意形成活動は、図2に示すように4回のワークショップをとり行い、ワークショップの目的、調査地区の現況と課題、まちづくり事例の紹介、まちづくり重点整備のイメージづくり、まちづくり方針の方向性などについて、行政・住民の共通認識に基づいて進められた。

現在まちづくり補助事業（まちづくり総合支援事業）が採択される見通しが立ち、来年度以降事業の進展が望まれる状況において、まちづくり方針の方向性（→基本理念・目標の共有）の合意に基づく各施設毎の施設計画（都市環境デザイン）を住民との協働作業において立案し、設計・施工へとそのプロセスを踏まえていくものとしている。

3. まちづくりのプロセスとその進め方

都市環境デザインを立案する過程において、行政主導により計画された案件について、住民とのコンセンサスを得ながら展開していく従来のやり方から、住民の参加を通じて自主的で主体的なまちの魅力づくりへと変化していくことが大切である。

本まちづくり事業計画については、合意形成活動を通じて計画立案に反映させる必要があるものとして、まちづくりワークショップを開催し住民意向を反映したわけである。

しかしながら、住民参加のもうひとつの側面として、「自分たちが考え、提案されたことが実現されること」という面については、長期に渡った住民とのコンセンサスが必要であり、活動の展開を継続する必要がある。このことについては、まちづくり総合支援事業の認可期間内（平成14～17年度）に施設整備を施工することから、住民にとって目に見えるカタチで進行していくため、分かりやすいまちづくりの展開なのではないかと思われる。要があるものとして、まちづくりワークショップを開催し住民意向を反映したわけである。しかしながら、住民参加のもうひとつの側面として、「自分たちが考え、提案されたことが実現されること」という面については、長期に渡った住民とのコンセンサスが必要であり、

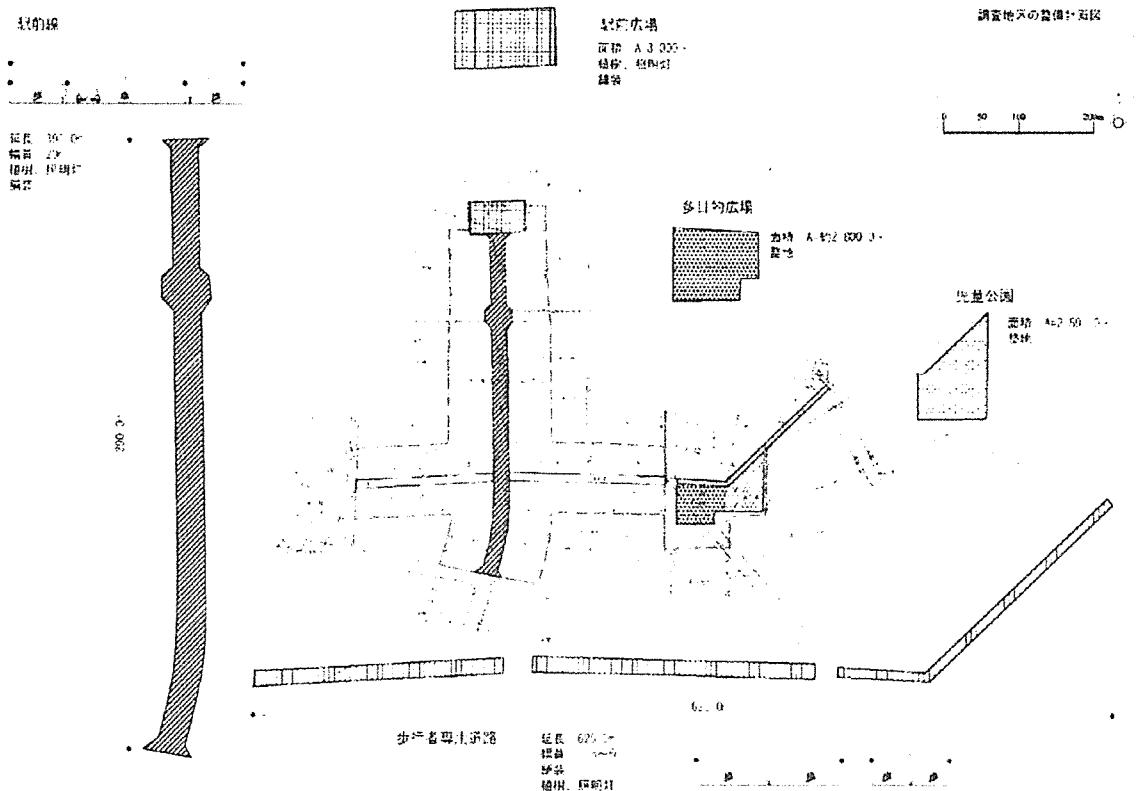


図1 調査地区図

活動の展開を継続する必要がある。このことについては、まちづくり総合支援事業の認可期間内（平成 14～17 年度）に施設整備を施工することから、住民にとって目に見えるカタチで進行していくため、分かりやすいまちづくりの展開なのではないかと思われる。

まちづくり補助事業（ここではまちづくり総合支援事業）による、住民とのまちづくり補助事業（ここではまちづくり総合支援事業）による、住民とのコンセンサスを踏ました、都市環境デザインの構築のあり方として、次の 2 点について整理する。

①まちづくり総合支援事業を導入するための合意形成活動

まちづくり総合支援事業を導入するための合意形成活動のポイントは、まちの現状や共通の問題点による住民意識の把握を行い、

まちづくり重点整備のイメージの共有や施設整備におけるまちづくり方針の方向性などについて、行政・住民の共通認識に立った計画立案を推進することに重点を置く必要がある。また、今後個々の施設整備を推進していくための「動機付け」の段階でもある。

②事業推進のための合意形成活動の継承
まちづくり総合支援事業の認可に伴って、これまで進められた合意形成活動を継承し、各施設における具体的な都市環境デザインについて、行政と住民の協働作業で進めていくことが必要とされる。

住民参加を進める上で、その意向を反映し分かりやすい形で示すことが大切であり、その手法については引き続きワークショップ形式による合意形成活動が有効であると考える。

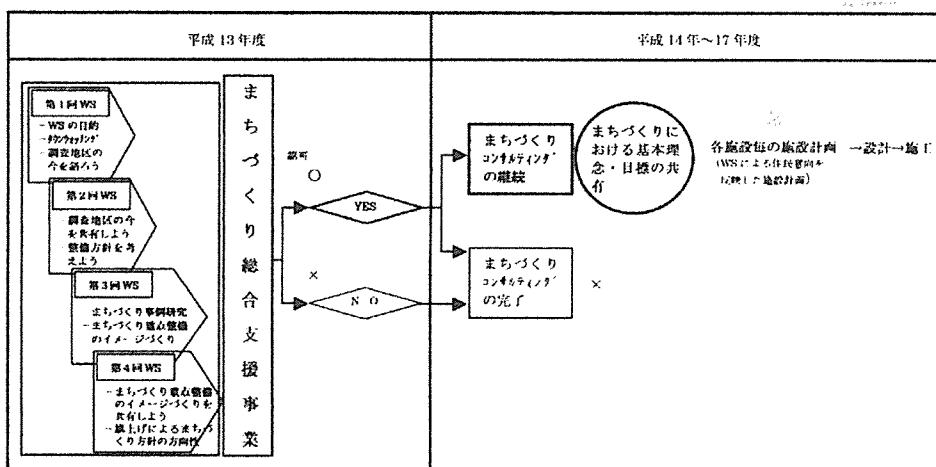


図2 事業推進の流れ

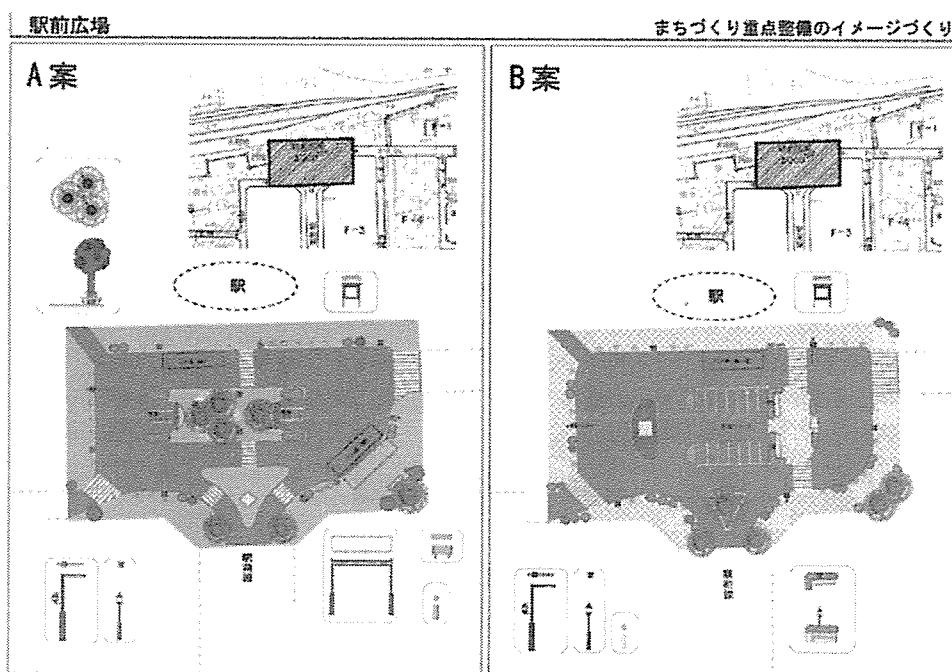


図3 4回のワークショップにおいて住民の意向をベースとした各施設の平面パース
(駅前広場)
(都市計画道路)

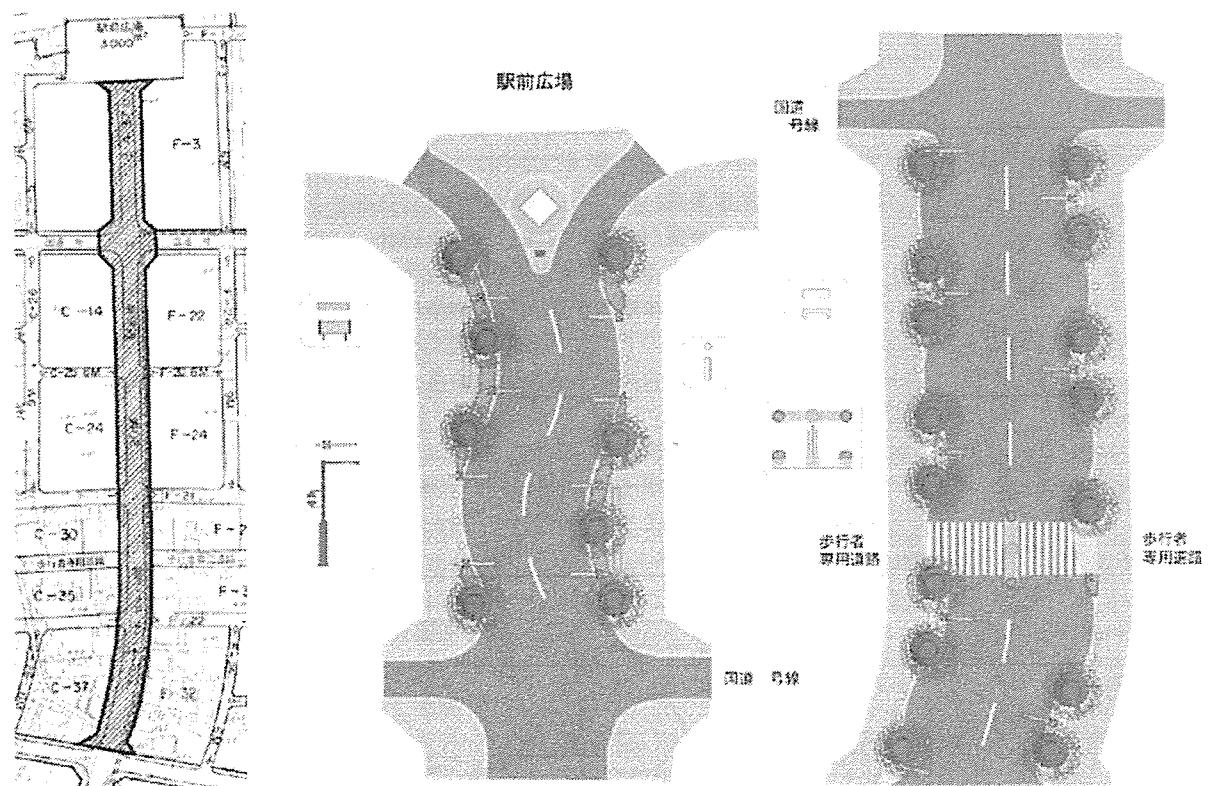


図4 4回のワークショップにおいて住民の意向をベースとした各施設の平面パース
(歩行者専用道路)

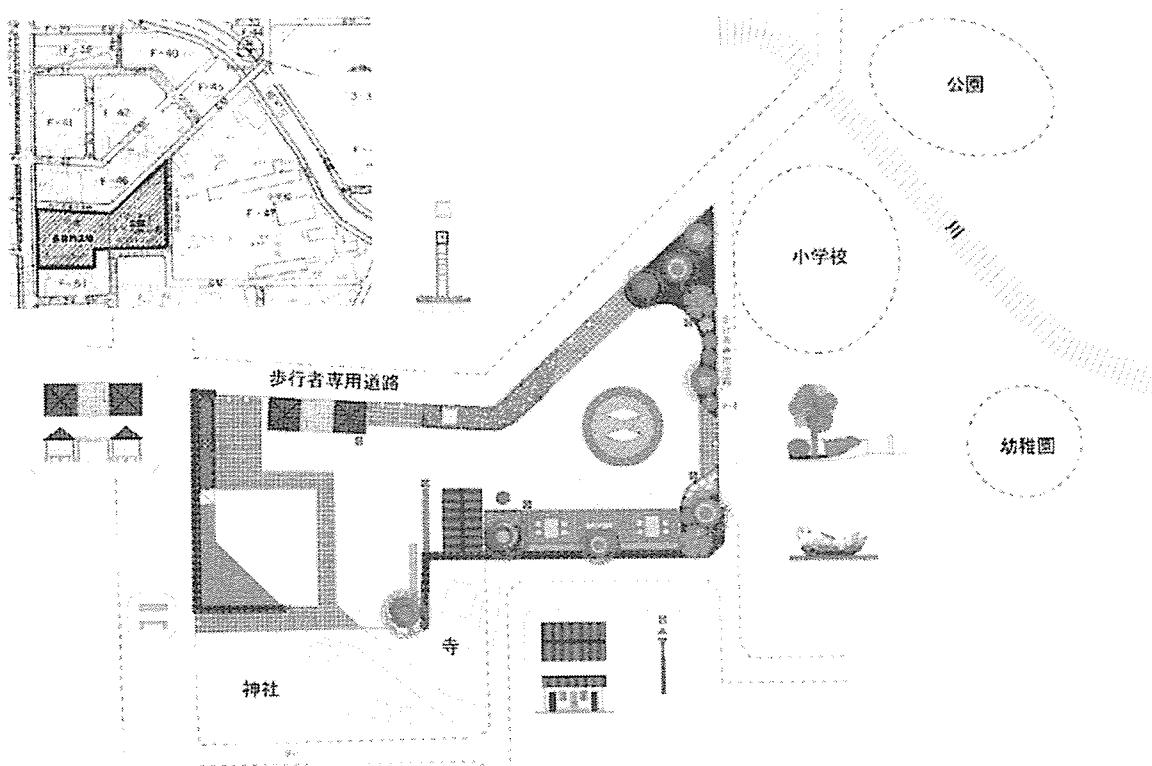


図5 4回のワークショップにおいて住民の意向をベースとした各施設の平面パース
(公園・多目的広場)

金沢の町型 (まちがた)再考 と路面電車再生 へのみちすじ

吉田 洋
YOSHIDA HIROSHI

株森 俊偉+ARCO 建築・
計画事務所

金沢周辺や北陸地域の話題ばかりに終始しそうで申し訳ないが、金沢の中心市街地から路面電車のレールがはぎ取られるように無(亡)くなつて、もう早や35年が経過した。隣県の福井市や富山市、高岡市では、戦災復興事業で道路が金沢市より恵まれたことなどもあって、辛うじて1~2系統の路線のみ残存することとなつた。しかしこれらの路線でも慢性的な赤字経営は否めず、いわばお荷物路線とか前近代的な産業遺物といった扱い方をされ続けたのが現実での姿だった。そして案の定、その不安が的中するかのように、福井の京福電鉄は車両不良などによる衝突事故を短期間のうちに繰り返し、運転休止そして廃線という、35年前金沢が経験したのとほぼ同じ命運を迎えたやに思われた。

しかし、がしかしである、その福井市の路面電車は、市民県民の大合唱のもと、不死鳥の如く甦りそうなのである。そして片や高岡市でも、今も走っていることそれ事体が大いなる奇跡……と、私には感じられていた加越能鉄道が、これも市民による地道な存続運動とこれに応じる行政側の赤字補填による第3セクター化で、奇跡の存続が果たされようとしている。

高齢化社会の進展、持続可能な地域の実現、スローフード全盛等々、35年前とは違う社会情勢が追い風になっている点も否めないが、どうもそれだけではないようと思う。ここに至るに及んで、日本海に沿う雪国特有の地道で伝統的な暮らしぶりというものが本来的にあって、それに何かとに馴染んできたはずの北陸育ちの人々は、単なる速いことづくしが總てに優ることなのか……とか、自動車交通を大前提に据えるまちづくりや環境づくりが、人々の幸福を実現する基盤を形成しうるものなのか……とか、株価や為替の国際変動が日頃の我々の生活にとってどれほど重要なものなのか……とか、身辺に蔓延った様々の素朴な問題や疑問に対して、そろそろ自らが培ってきた知恵と経験の中から、自分達のための最適な答えを捜し出していくべきだと自覚しつつあるのではと、ふと考えさせられるからである。

ふり返ってわが金沢市の旧市街エリアは、馴自然型をベースにした比較的大きめの非戦災都市であることで評され、たまたま今年のNHK大河ドラマ「利家とまつ」の後年の居城地となったということで、百万石城下町の草創期形成過程についても簡単な

紹介がされるであろうが、城下防衛戦略上の必要もあったためか、概して迷路状といえる街路網で、良くぞここまでと感じるほどの曲りくねった見通しの得にくい街路が続き、更に行く先々で三叉路や広見(といわれる小広場)に遭遇するなど、街並みや空間認知に不案内な者にとっては、京都や奈良などの街に比べるにつけて、諸事面倒な街並みと評されるのであろう。

しかし、金沢の街並みの魅力や面白さは、まさにこの点に凝集されるのであって、生身の人間の心理や生理にとては、存外こうした街型の方が(居)心地良いのではなかろうか。

こうして考えを進めれば尚更のこと、昭和42年(1967年)に市内電車網が市内から一掃されてしまった選択が、極めて残念でならない。まちまちの裏通りにこそ、この都市の多彩で極められた魅力が溢れんばかりに連なっていた事に気付いてか知らずか、ヒューマンスケールの街並みには事欠かなかつた金沢という街の本源的魅力を保持させながら、その後に巡って来た創造型都市へのスムーズな移行に際しても、いかにその都市の性格付けや他所の人々を惹きつけるに貢献できる貴重な都市の装置であったかという点が、今更ながらに痛感されるのである。

当面こうした状況へと、スムーズに回帰・誘導させることは、ここで言うほどに容易(たやすい)ことではなかろう。しかし、市民の大勢の自覚による後押しがあれば、それほど非現実的なことではなくなる。それというのも、ちょうど来年の1月から県庁が駅西ゾーンに移転することになり、それをきっかけとする「シティライナー」と称するシャトルバスが、郊外私鉄電車のターミナル駅(野町駅)~北陸最大のターミナル(金沢駅)~新県庁付近を直結することになっているが、これを将来の市内電車などの新都市交通誘導への試金石として活用していくのかどうか。更には、近未来に迫った北陸新幹線の開通を見越してのJRや私鉄在来線間の相互乗り入れ実験や副都心のP&Rターミナルへの在来線延伸化(例として、野々市中央地区への北陸鉄道石川線(最寄駅である北鉄野々市駅や押野駅などから)の一駅延伸化など)の戦略的都市改造が図りうるのかどうかなど、金沢広域都市圏の市民や県民の良識・見識が改めて問われ直す新たな段階を至近に迎えていることを余程に自覚すべき時であろう。

都市に息づく 「ワンニヤンの景」

藤本 真理子
FUJIMOTO MARIKO

株アイ・ツウーオー

人と自然の共存社会が謳われ久しい。野生の息づく自然と人環境との間に緩衝地帯を設け……。都市環境の中にビオトープ、グリーンベルトを設け……。都市に自然を再生、保護、保存し、人の都市環境は充実の方向に向かうであろう。ニューヨークの街路樹を駆け上るリス、早朝、ロンドンの市街地を徘徊するキツネ。イタチの姿すら少なくなった都市を、都会と考える日本人が驚く光景である。しかし環境づくりの中で、伴侶のペット達は如何に位置付けられているのであろうか。

ペットは、古えから我々と生活を共有してきた仲間であるが、人間と同等ではない。癒し犬、癒し猫達は、独居老人の増加と共に増加の一途を辿り、少子化の中、兄弟の代わりにペットを家族とする傾向にある。独居者が自立不能となり、介護施設に入居した場合、唯一の同居家族のペットは…? どんな制度より彼らをそばで見守り、心を癒し貢献してきたペット達の未来の保証はない。ペットは命を持つ道具。使い捨ての「命」である。使命を終えた豪美に、死が与えられる。

「あなたは何れ、施設で人生の終止符を打つのだから、ペットを飼うには相応しくない。」

と言えますか？盲導犬、聴導犬、セラピー犬、猫やその他のペットも癒しの貢献度は高い。飼い主にとって、訓練されていない普通のペットでも、その価値は家族と同じである。ペットの福祉を考えなければ、人が求める最も身近な動物との、共存は成り立たない。人間のおごりを戒める自然との共存論は、足元に正座し従順に癒しの任務を貢献する命を無視しては、成り立たないのでないだろうか。

最後の家族であるペットと引き離された悲しみに、生きる気力を失うペットシック症。痴呆促進や自閉症。ペットへの依存度の高まりと共に、現代病として広がりはじめている。ペットの住民権？を解決しなければ、最も身近な「人と自然との共存」は空論となる。

リストラも珍しくない今日、失業者のペットは？地震等の被害犬は？など不安は募る。英国では、失業証明書を提示すると、失業者のペットの獣医代は無料となる。家族となったペット達に、人の福祉と平行したペット福祉の充実が必要である。しかし我国では、ペットは納税者ではない為？都市計画や福利厚生の恩恵は要求できない。野生化？すれば野犬として駆除される彼らは、飼い主より早い寿命全うを望むより他ない。

都市環境に暮らすペットの日常的福祉は…？都市にはさまざまな公園が、人の憩いの場として計画されている。その利用方法にペットの同伴を拒むものが増えている。河川敷きも同じくである。これは、ペットを家族とする者の利用を拒むものと同じである。理由は、飼い主のモラルの未熟。汚物処理の不徹底、植栽の傷み、他人への危害、特に、犬嫌いの人間への配慮である。どこか嫌煙権と似ている。嫌犬権の圧力は絶大である。ペットの福祉を考える飼い主のモラルは、今、めざましい向上の方向にある。かつては、飼い主にとって都合の良いように躊躇が行われ、飼い主のモラルを反映していた。今、教育機関、施設も増え、合宿制、家庭教師制、グループ学習等の初等教育が行われている。カリキュラムの1つに、「排便は自宅内で行い、散歩は運動と憩いに徹する」とある。人社会に共存させるべく、飼い主の努力である。これらペットの義務教育化の浸透が、共存の突破口とも考えられる。一定教育を受けたペットは、公共交通機関において人間座席への同室を認められつつある。この一定教育基準の一般認知とモラルの向上が、現況突破の糸口である。家族となったペット達は、外食も買い物も図書館だって同伴できるようになると、考えたい。

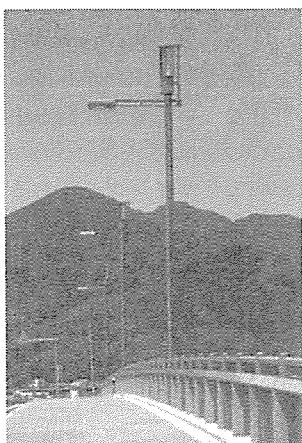
では都市環境として、憩いの場の共有は如何であろう。ペットの家族以外の幼児・高齢者・嫌犬者にとって、野犬も家庭犬も同じ危険性がある。現在の時点では、分離が必然である。結果、衛生・安全の法則により公園等公共施設に、犬同伴禁止等の制約が条例化されている。これは、喫煙者と嫌煙者の関係と同じである。ペット同伴を望む者は「喫煙コーナー」に値する開放された「ペット同伴の憩いの場」を求めている。ペット先進国には、「DOG RUN PARK」が、定着を始めた。そこでは犬は鎖を外され、自由に家族と戯れ、風と共に馳けり、自然を満喫できる。飼い主達と同様、犬同士のコミュニティが生まれ、ストレスの解消が情緒の安定を育む。

わが国では人間と同じく、運動不足、肥満、心臓病、車と人ごみの中の散歩によるストレス、分離不安症など都会病を抱え、自然と戯れる自由な時空を、ペットとその家族が求めている。太古から都市の景に、ペット達は必須アイテムとして存在してきた。都市環境を考える時、人・家畜・野生のどの分野にも属せないペットの環境も考えたい。太古からの伴侶の環境を無視して、平等な快適と、共存可能な調和はないと思う。

時代はカスタマイズ ～ストリートファニチャーの現状に関する雑考

徳永 明
TOKUNAGA AKIRA

株式会社・エー・デザイン



昨今、巷はカスタマイズやオーダーばかりです。人と違うものを持ちたいという欲求に規制緩和も手伝って、車やバイクから家具、携帯電話そしてファッションにいたるまで、その傾向は多岐にわたっています。あくまで企画者側の意図内でのバリエーションという見方もできますが、グッドデザイン賞でも取り上げられたナイキのネットによるオーダーシステム（NIKE iD）や、サードパーティ参入により予期せぬ盛り上がりをみせる商品等、もはやデザイナーのプロトデザインは消費者にとっては一番魅力のないものかも。

1. ストリートファニチャーのカスタマイズ

そこで都市環境デザインに目を向けると、やっぱり見えてくるのがカスタマイズ好きの傾向です。カスタムベースは都市環境デザインの中での「モノ」といえるストリートファニチャー（以下 SF）。SFはパブリックな社会資本の一つですし、前書きした個人消費材レベルとはもちろん違うのですが、そこに選ぶ人がいる以上、現在のトレンド、はたまたカスタマイズ好きの国民性は隠せません。一時期バブルの波にのって、地域のオリジナリティ創出を合言葉に、フルオーダー SF が街を埋め尽くしましたが、今のこの時代フルオーダーなんて買える自治体なんてそうそうありません。そこで経済性もそこそこで、なおかつセミオーダー感覚で時代（担当者）の欲求を満たしてくれるが、規格品 SF のカスタマイズです。

2. 吹き荒れるカスタマイズ旋風

今から 8 年ほど前、丁度バブルが崩壊した前後ですが、ある景観材メーカーから新しい時代の SF のシリーズ商品開発の依頼を受け、翌年には発表・販売開始しました。発表とは少々おおげさですが、バブルの終焉による経済状況を見越した低価格とこれまたバブルでつきまくった贅肉をそぎ落した形態や機能が評価され、製品の一つであった街路用フェンスがある賞の部門金賞をいただいたもので、ついつい前振りしてしまいました。

しかし、さらなる景気後退は思ったより急速でそれから 3 年後には、その製品でさえ高価格レンジとなってしまい、はやくも次世代超低価格製品の開発を余儀なくされることとなってしまったのです。（あくまでメーカーさんにとってでわたしにとっては・・・）

目標は価格の 50%OFF! メーカーにとっては死に物狂いの原価低減でしたが、営業サイドのこの価格以上では売れないとい

う至上命令もあり、デザイナーの努力?のかいもあって、クオリティ・機能をそれなりに維持しながら、なんとか目標を達成しました。開発した製品は徹底的原価低減により、それこそ骨だけのミニマルな形態でしたが、防護柵の機能性と景観での黒子性を考えれば「けがの功名」といえなくもなく、カタログ等のプロモーションでもその辺のシンプルビューティを強調し、発売当初の評価もそれを裏付けるものでした。

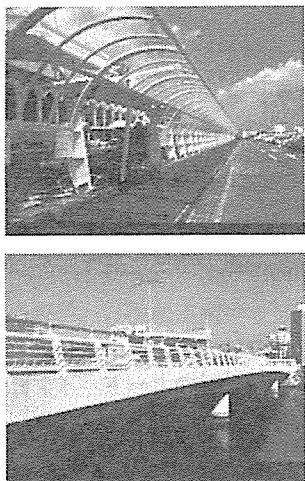
（あくまでボトムレンジのガードパイプとは差別化した商品です）

販売開始から 3 年ほどたち、メーカーのほうから入る情報は好評で、私も「やはり価格ともしかしたら“骨だけ”デザインもわかつてくれたんだな。よしよし」とほくそえんでいたところ・・・が施工写真を見てびっくり! 納入された製品はカスタマイズドのオンパレード。実際はセミオーダーというのが一般的ですが、シンプルなストラクチャーはそこにはなく、波模様や地域の産物か何かのキャンバス状態。護岸道や歩道の遮蔽感を払拭し、開放的都市景観を創造うんぬんのデザインコンセプトは見事に葬り去られました。しかし言い訳させていただければ、私がうなってしまったのは自身のデザインコンセプトが反映されていなかったことではなく、あれほど苦労して取り組んだ価格のコンセプトが無意味になってしまっていることでした。聞けば、50%OFF した新型にカスタマイズすれば最初のタイプと同程度のコストだとのこと。市場は拒否したはずの価格であったはずなのにどうして。

どうやらメーカーの営業も私も時代のカスタマイズ指向（嗜好?）が見抜けなかつたようです。最初の製品の価格市場は今でも存在はしていますが、それは「メーカー規格品なんて無個性なものじゃ町のオリジナリティの創出につながらない、かといってフルオーダーなんてこのご時世とてもとも、せめて部分的でもオリジナルデザインをやるために安いカスタムベース商品」の市場だったようです。SF までも、うーん、恐るべしカスタマイズ旋風。

3. 地域、担当者、製品、それぞれの主張

公共事業に使用される SF 製品等、各地域の発注者、設計者、メーカー、地域住民等いろいろなフィルターにかかる「規格モノ」は企画開発段階の意図と違う方向に流れてしまうのは宿命とは言え、デザイナーとしてはやはり残念です（アアルトがデザインした街路灯はカタログ商品とはいえ当然カスタマイズ不可）。もちろんデザインに関して多様な視点が介在するのはいいこ



とですし、一製品がもつ設計思想など都市景観レベルから見た場合は小さな問題にすぎません。ただ小さな「モノ」に対するそれぞれの主張が、つぎはぎ嗜好の市場とつぎはぎの都市景観を生む一因となってしまっています。SF 等都市環境要素としての「モノ」が持つ個人的感性や地域特性をも越えた普遍性の具現化とは・・と締めたいところですが、地域のオリジナリティは決してジーンズや形態電話のカスタマイズと同様には創出されない程度がこの雑考の限界です。例えて結論無しで恐縮ですが、締めは余談です。

他と違うものをやりたい (=人と違うものを持ちたい?) —そして、将来自分の子に「お父さんがやった仕事（オリジナル）だよ」と自慢したい。私も今より若いころはこの業界に関わる者のかわいい憧れと感じていましたが、ある発注担当者のこの一言に対し「自分の子供ではない、100 年先の子供達でも足りない。この仕事はそんな志ではやる資格がない」と一刀両断したあるお方は、私を 10 年成長させ 10 年寿命を縮ませました。（都合 20 年短命となる）

特集

12

ようやく CG が 土木分野に定着

奥 史子

OKU HUMIKO

コピス CG スタジオ

私はCG屋としてプランを形にして見せるのが仕事ですので、計画の上流や概念的なものに接するよりも、それらが具体的に「形」となる時点で、あるいは形を一般にアピールする際のサポートの役目をすることになります。という立場上、かかわった物件についてデザインの視点から述べることはできないので、テーマからはやや逸脱するかもしれませんご了承ください。

建築専門のCG制作会社で初めてコンピューターに接して以来、フリーランスの現在まで、およそ14年になります。当初は建築分野の「プレゼン」＝「よく見せる」

（3次元で見せること自体が大きなインパクトを与えられた時代でしたが）という用途で始まり、後にゼネコンがさかんにCGを自社内でつくり始めたことと、時期的に大きな建築物件があきらかに激減したため土木分野へと手を広げ「シミュレーション」＝「確認する」としての意味合いが強くなりました。時代的にもシミュレーションが強く求められるようになったといえます。おそらく、ゼネコンがCGを社内制作し始めたのも、シミュレーションからプレゼンまでを一貫して身近で行いたいと願った結果だと思われます。

一方、建設コンサルタント業界は、当時（9年ほど前）まだ全社的にCGを取り組もうという状態ではないように見え、個々の担当者や役所担当者の意欲に拠っているところが大きかったようです。我々もそれの方々を突破口に、より販路を広げようと（もちろん景観的な責任といったことを背景に）一度きりの「確認」だけではなく「検討」し何度も繰り返し使って下さい、つまり計画進行のすぐおそばにおいて、と

盛んにアピールしたのですがこれはなかなか実現ませんでした。その後数年来のマンションブームで販促ツールとしての用途が増えたため、しばらく公共デザインとは離れていましたが、再びここ1年半ほどは土木一色となっています。

この間コンサル側もかなり意識的にCGについて情報収集されていたようで、以前なら「とにかくCG使って」という役所の注文に対して、その計画でのCGの使い方の提案から始まる企画書を作成したうえコンサルのふりをして役所に同行などということもありましたが、今では最初からはつきりした目的とかなり具体的なイメージをもって打合せが進みます。社内にCGソフトの1、2本もあり、社内のオペレータと協同してみてもらえないかという話などからすると、かつてのゼネコンのように本気でトライ&エラーをやっていこうという流れなのでしょうか。（そうだと面白い。一度その実態を聞きにまわってみたいと思いますが）

デジタルとはいえ、まだ形状作成は手作りのようなもので、確かにスムーズに「確認」→「検討」を繰り返すにはハードルも高いのですが、今後避けて通れないことも明らかです。

「形は見えるとみんなが解る」
実現可能なところからでも、デザインコンセプト→形、の肝心な「→」での検討が十分にされるためにCG屋は何ができるのか、公共デザインにおいてデザインツールあるいは意志決定ツールとしてのCGはどういうものか、機会あるごとにご意見を聞きながらまた提案しながらやっていきたいと思っています。

小さな子供も 共存できる街

高橋 泉
TAKAHASHI IZUMI

Architecture@ism

昨年春に出産し、現在は次の出産を控え集中育児の日々を送っている。この時期を機会に「子供の育つ環境」として都市環境デザインを再考している。

1. 次の時代へどうつなげるかの視点をもつ

都市環境デザインの分野は多岐に渡るが共通して我々の仕事は物理的に残る「次の時代が受け継ぐ資産」をデザインしている。その環境の中で子供は成長し感性を身に付けていくということを忘れてはならないだろう。

2. 教育ではなく「環境」が感性を育てる

子供は色々なことを空間の中で感覚的に学んでいく。スケール感覚、色彩感覚、音光の感覚、触れる感覚、バランス感覚。些細なことだが、子供の感性は小さな頃から、日常生活の中で自然に育まれていく。

3. 小さな子供も共存できる街

東京で生活していた頃、都市の中に小さな子供は殆ど存在していなかった。しかし東京に限らずこれから都市部では都心居住の意向が高まり、とくに子供を育てながら働く世代の居住は増える可能性が高い。最近注目されつつある職場近接の保育所の人気などは今後の生活スタイルの変化を示唆するとともに「子供の育つ環境」の見直しを我々に投げかけている。

また、社会現象として母子家庭が増えていることも見逃せない。働く場所と子育ての場所は共存することが切実に求められることになるだろう。

小さな子供も共存できる街とは？子供が健全な感性を育むために我々が守るべきことは何だろうか？

4. 子供が安心して接することのできる環境

保育所へ預けるために、電車通勤を余儀なくされる。人ごみから一旦回避できる場所がほしい。(駅前保育といわれるが職場に近いほうが望まれることも多い)建築緑化が注目されているが、駅にも立ちどまれる緑がほしい。EVの不足や至る所に段差のあることからベビーカーの使用は難しい。施設の入口でベビーカーを借りられるサービスがほしい。このような些細な要望の一つ一つに耳を傾けることが大切に思われる。

また、保育所との往復以外にも病院や施設、地域活動の場、買物、催し物、パーティー等、様々な目的で子供を連れて街へ出かけたい人々が沢山いる。このとき子供を安心して連れて行くことができる環境が整っているか否かで行動の範囲はかなり変わってくる。

5. 街（社会）の中で子供の可能性を広げる

私は現在、都市部から離れた所に住んでいる。自然に囲まれた静かな場所であるが子育て環境としては、都市の情報や機会も享受しながら様々な場に参加し、子供の感性を育てていきたいと思っている。

子供の可能性を広げるチャンスを我々はもっと積極的につくるべきである。

6. 男性も子供と接する機会を

子育てをする女性が社会へ問題提起していくことは重要だが、同時に男性も子供と接する機会を少しずつでもつくりながら「子供の育つ環境」を自分のこととして捉えてほしい。都市環境をデザインする専門家の使命として子育ての現実を見てほしい。

次の時代への視点を、忘れてはならない。

学生レポート 森川さんを訪ねて

中野 弘巳
NAKANO HIROMI
大阪大学大学院（学生）

いきなりこんな質問をぶつけてしまいました。

「専門家ではない人に＜あなたは何の仕事をする人ですか？＞と聞かれたら、どう答えますか？」。

今思うとナンセンスな質問でした。筆者を含め都市環境デザインを目指す若者がどこかに抱えている「＜都市環境デザイナー＞とは何者ぞ」という思いが口をついて出てしまっていたのでした。結局森川さんをいたずらに困らせてしまったわけですが、しかし、森川さんのお話を聞き、「人となり」を知る中で、何か手がかりを得たような気がします。

「向う三軒両隣、的な街の細部から県レベル、近畿などといったところまでを通してイメージできる構想力が必要なんじゃな

いかな、それが都市プランナーの職能だと思うな」。

その言葉どおり、森川さんの守備範囲は多岐に渡ります。兵庫県のため池整備構想、東播磨・中町の住宅マスタープラン、そして大津まちづくり百町館の取り組みなど、まさに街の細部から広域まで。そして、そこに必ずあるのは「ひと」との関わり。特に今力を入れているという大津での取り組みは「市街地活性化に住民がどれだけ関わることができるか」のテストパターンだそう。大津の中心市街地の空き店舗を活用して、町家保存の活動の拠点、交流空間の提供などをされています。大津にもこんなに町家が残り、しかもこういった活動が盛んだったとは知りませんでした。

「ビジネスとしては考えてないんだけどね、

お金じゃなくて、意識づくり、仕掛けづくり。しんどいだろうけど、プランナーとしてはこれの方が面白いんだよね」とのこと。確かに整備や、規制ならいくらでもできますが、本来はそうではないはず。結局街を使うのはそこに暮らす人。人が動いてこそ、街が動いていくのでしょう。

「俺はやっぱり空間より、人間に興味があるんだろうな」その表情に、街と人への思いが伝わってきます。メタボリズム華盛りの70年代に建築を目指し、しかし現在は、都市環境デザインに熱く取り組まれている森川さん。関心の移り変わりはその辺りにあります。

まちづくりの活動に「時間」と「パワー」のあるオバチャンや学生に期待をかけているという森川さん。今の学生はうらやましい、と言います。

「今は街への関心も高まって、そこに関わるチャンスも増えてるでしょ。今の学生はいいよね、どんどん関わっていって欲しい。学生のベンチャーだとかがあるけど、それはこの分野にも可能性があると思う」

そういった熱くて小さな活動やビジネスが、今の街には必要とされている、ということでしょう。<まちづくり>の「ビジネス」としての部分と「使命感・責任感・思い入れ」といった部分の両方の部分が確立されることが必要とされているように思えます。学生も頑張らねばなりません。

お気に入りの街について聞いてみると、「なんでも感動しちゃうんだよね。大自然の景色も素晴らしいし、田園風景も好きだしなあ。古い街並みも、もちろん新しくてカッコイイ建築も好きだしねえ」との答え。都市環境デザイナーは、それこそ街の細部から広大な空間にいたるまで深い関心と愛情を持っているということでしょうか。

「何か一つ挙げたほうが良いんだろうね。ごめんね」と笑顔。

その表情を見ていると、森川さんの活動が、人をどこかで結びつけ、街を少しずつ変えているんだろうな、という気がしてきます。確かに、記事を書くにはちょっと困った回答なんですけどね（笑）……。

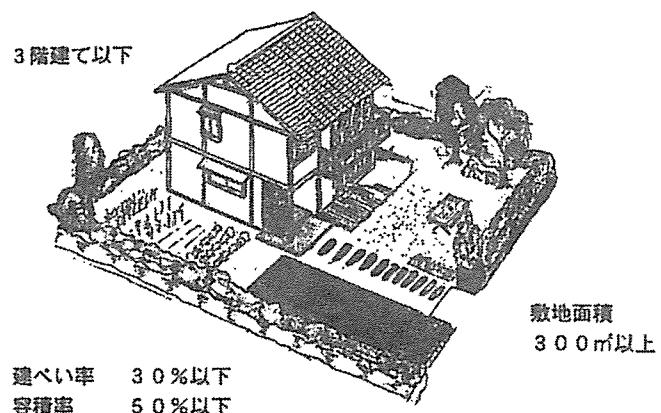


写真1 中町田園住宅例

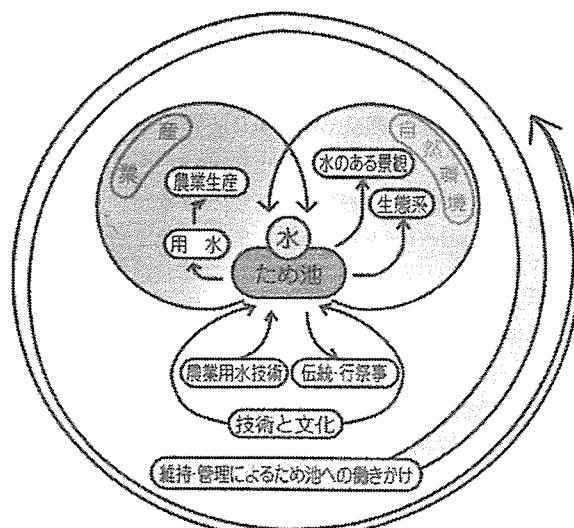


図 ため池を中心とした環境と働きかけ
写真2 ため池と環境

～参加と連携による保全・整備と管理・運営～

1) 取り組みの流れ

ため池の保全・整備への取り組みの流れは、図のように整理できる。

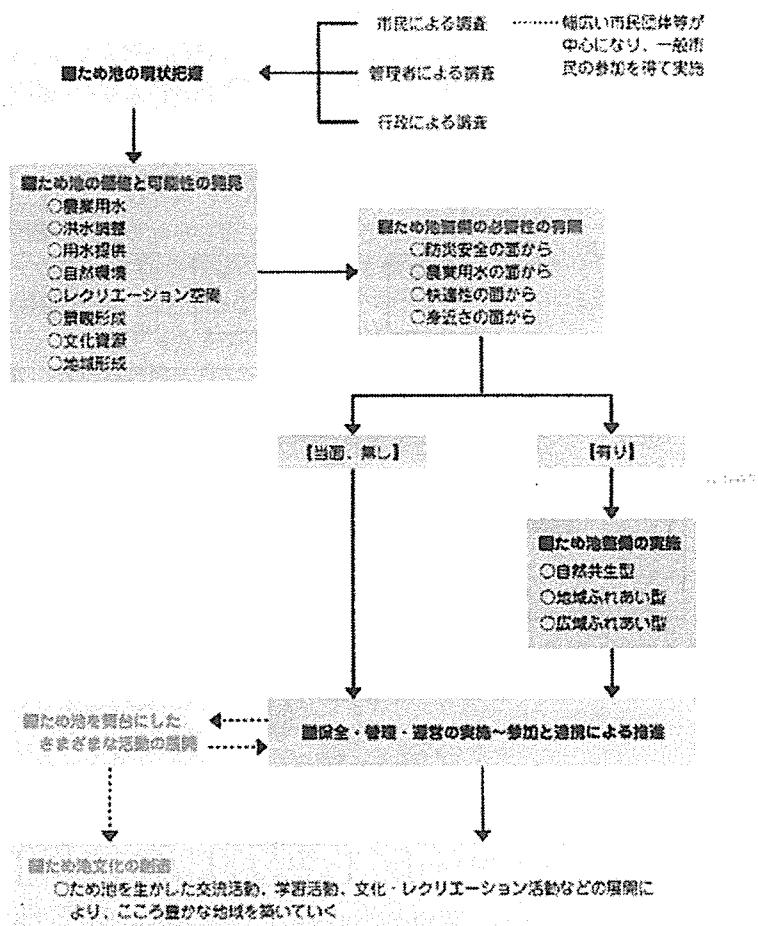


写真3 ため池保全の取り組み

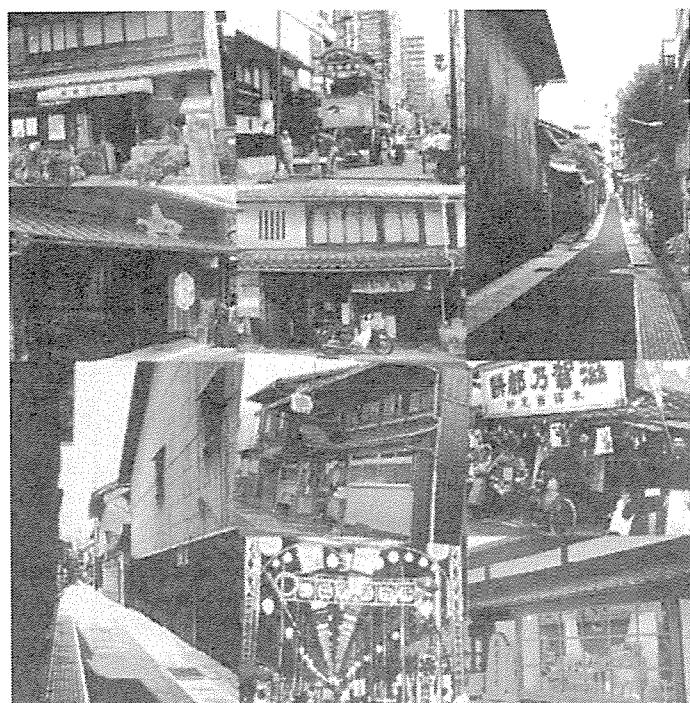


写真4 大津の街並み

学生レポート 鳥越けい子さんを訪ねて

中野 弘巳
NAKANO HIROMI

大阪大学大学院（学生）

例えば、「遠くの音がよく聞こえるから、雨になるんじやないか」だと、朝の空気の香りと湿度で「おや、春めいてきたな」だと、そういうことを感じながら生きることを、都市に暮らしていると忘れがちになります。もちろんそういう感性を取り戻すことが望ましいと誰もが感じてはいるものの、現実にはそれが都市デザインに生かされていないというのが現状ではないでしょうか。

鳥越さんの取り組みの数々は、そういう五感で心地よいと感じられる環境の創造を提案されています。「サウンドスケープ」という分野からの都市環境への視線は、非常に興味深いものでした。

「サウンドスケープ」という概念が、単純に「騒音」や「街に流れる音楽」といったことを扱うものではないことを特に強調されていた鳥越さん。例えば「瀧廉太郎記念館」の庭園整備計画。「瀧廉太郎の豊かな感受性を育てた環境を、訪れた人が追体験できるような環境を設計したかった」との言葉どおり、当時の廉太郎旧宅を取り巻く自然環境、社会環境、文化を綿密に調査しデザインに活かしておられます。

従来の環境デザインとの違いとして、ここで注目しなければいけないのは、目だけで捉えがちだった環境を耳でも捉えられるように十分に配慮されていること。竹のざわめき→モウソウチクの意識的な配置、鳥の鳴き声→実のなる木を配置、飛石と下駄の響き→来館者が庭を見学する際の置き下駄、など様々な工夫が凝らされています。

「音環境づくり」という観点では廉太郎の音風景を追体験できるようにするという"復元"を試みたわけですが、従来の庭づくりという観点から見れば"新しい創作"したことになったんです。サウンドスケープという考え方を取り入れると視覚的デザインがむしろ自由になるということなのかもしれません。

鳥越さんは東京芸術大学で音楽学を専攻

され、都市環境デザインの専門家としては珍しい経験を持っておられます。なぜ音楽から都市なのか、都市を学び音楽に関心のある筆者としては興味津々。「都市や自然の環境音に興味を持っていたから」とそのきっかけを語ってくれました。「音楽から都市」と言うよりは「音楽から音へ」そのフィールドを広げられたというのがきっかけだったよう。そして「音」は環境と深い結びつきにあり、研究の実践は、現在の専門である音環境デザイン・環境教育に繋がっています。

お気に入りの街について訊ねると、「地域の音の風景が魅力的だから」と井の頭公園、吉祥寺界隈を挙げられました。公園に残る自然が湛える音、吉祥寺北口の雑踏が生む音、それらが幼い頃の記憶と重なり、

「故郷の音」として感じられる魅力的な環境がそこにはあるようです。関西在住の私としては是非チェックしておかなければ、と早速メモ。「でも音の風景の見極めは注意してください、音風景は一日の間でも大きく変わるものですからね」確かに、私も新しいアパートにいざ住んでみたら夜は暴走族がうるさくて大変だったことを思い出しました。

そう「気配」が大切なんだ、と気付かされます。五感で感じる空気、風、熱、光、そして記憶に繋がる気配。ボンヤリとその大きさには全ての人が気付いているのに、なかなか手に入れられない「気配」を感じられる空間。「そんな空間、どうやったらデザインできるんでしょうね」と思わず聞いてしまいました。「難しい質問ですね」としばらく間があいて、「デザインをする以前に、そういう「気配」にこだわって、イメージをきちんと作ることでしょうか、難しいですね」と随分と困らせてしました。

アトリエ兼ご自宅に鎮座する「古い家のガラス戸」の凜とした様子は、しかし、「気配」をデザインすることが不可能ではないことをちゃんと示しているように感じました。

■選挙管理委員会 役員選挙結果報告

伊藤 洋

ITOH YO

選挙管理委員会委員長

2002年2月18日に告示しました標記選挙の候補者届出の受理は、2002年3月4日午後6時に締め切りました。その結果、役員選出規定、同細則に基づく有効な届出は、代表幹事については立候補者5名、推薦候補者5名、監査役については立候補者2名でした。

その結果、役員選出規定第9条第2項に基づき、全員が当選人として選出されました。

なお、当選人は2002年7月に予定されている第12期定例総会における承認によって、正式に選任されることとなります。

■代表幹事当選人氏名（届出順）

／所属及び所信	
伊藤 登 ／株プランニング ネットワーク	これ迄、代表幹事として、学生会員、準会員の制度創設等に力を注いできました。JUDIの今後の10年の方向性を定めるべく、もう1期お手伝いさせて頂きたく思っています。
鳥越 けい子 ／聖心女子大学 教育学科	専門の、サウンドスケープを通じての経験と、都市をめぐる環境やデザインの問題を専門を超えた一般の人々の生活と意識にどのように広めていけるかといった関心を、今後のJUDIの活動にも生かしていきたいと考えています。
中井川 正道 ／株GK設計	身辺の経済的厳しさや労働の重みに負けて、都市環境デザインの活動も滞り気味ですが、このようなときこそ自身に、また社会に新鮮な刺激を与える努力をすべきだと考えます。 皆さんのお力を借りて、少しでも我々の職能の向上に貢献したいと考えています。よろしくお願ひします。
江川 直樹 ／現代計画研究所	JUDIの社会的意味はますます重要になってくると思われる。参加型のまちづくりの時代にふさわしい専門家の役割、専門家集団の役割も、ますます重要だろう。この2年（1期）、代表幹事をさせていただいたが、継続して議論してきたことの発展、展開のために、さらに頑張っていきたい。
川井 由寛 ／SLAスタジオ ジャパン株	日本で唯一の、都市環境デザインにかかるプロ達の集まりであるJUDIが将来ますます発展するように、少しでもお手伝いが出来ればと思い、立候補致します。
澤田晴委智郎 ／株澤田造景 研究所	都市の様々な問題が今まさに浮かび上がろうとしている今日、都市デザインの目指す所も大きく変化してきているが、それにも増して、会議という場の有り方も求められ、状況も変化して来ている。そして新たな問題の切り口を提言する場としたいし、新たなる会としてメンバーのなりたち方にも提言を加えてゆきたい。
八木 健一 ／八木造景研究室	新たな気持ちで、もう1期頑張ります。
柳田 良造 ／プラハ アソシエイツ株	21世紀に入り、また日本社会が転換期を迎える今、都市づくりに新しい発想が求められていると思います。こういう時代、都市環境デザイン会議の発展になにがしかの貢献が出来れば、幸いです。
杉山 朗子 ／株日本カラー デザイン研究所	新しい土地に行くと、新しい課題に気づかされるというようにまだまだ勉強の途中です。現在、市民と一緒に景観デザインのワークショップに取り組んでいますので、そんな生活の場の視点から、お手伝いできればと考えております。

丸茂 弘幸
／関西大学工学部
建築学科

タイミングがなかなか合わず、1期目は代表幹事会に余り出席できませんでした。2期目も何かとご迷惑をおかけするかと思いますが、関西ブロックからのもうひとりの代表幹事である江川さんの都合がつかないときは、できるだけ出席するように努めます、ということで、どうぞよろしく。

■監査役当選人氏名（届出順）

／所属及び所信	
大塚 守康 ／㈱HEADS	JUDI財政の健全化に向けて頑張ります。
成瀬 恵宏 ／㈱都市設計工房	都市環境デザイン会議の活動を側面的に援助していく形で、前期に引き続いだ監査役を務めたい。

1. 新会員の紹介

2002年1月1日～4月30日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

4月30日現在の会員数は、503名です。

氏名	勤務先
中村 芳明 日出平千尋 川窪 広明 橋口 周良 九後 順子 中田 政廣 田中 政勝	㈱ホージュ設計（北陸） 〃 大手前大学社会文化学部（関西） 日本興業（株）大阪支店（関西） (財)千里国際情報事業財団（関西） ㈱ナカタ空間企画（関西） ダイニチ㈱（関西）

氏名	変更内容（新）
工藤 勉	ヨシモトボール㈱大阪支店 〒530-0012 大阪市北区芝田2-1-18 Tel. 06-6372-1717 Fax 06-6371-0319
菰田 朋子	㈱建材技術研究所 〒285-0802 千葉県佐倉市大作2-4-2 Tel. 043-498-3867 Fax 043-498-3869
辻本 智子	㈱辻本智子環境デザイン研究所 〒656-2401 兵庫県津名郡淡路町岩屋1215 Tel. 0799-72-0216 Fax 0799-72-0217
中村 伸之	（有）ランドデザイン 〒604-8276 京都市中京区小川通御池南入ル西村ビル302 Tel. 075-256-5055 Fax 075-256-5025

準会員氏名	勤務先（フロック）
内藤 充彦 横山 公一	㈱フランシングネットワーク（関東） 〃

学生会員	学校名（フロック）
辻本 一英 中塩 愛子 木村 宏 石川 真理 吉成 主税 千葉明日香 岡田 晃明	高知工科大学大学院（四国） 〃 〃 〃 横浜国立大学（関東） 日本大学（関東） 中央大学（関東）

2. 退会者（2002年1月～4月）

浅野房世、五十川勝、伊藤嘉明、井上隆志、大竹雅之、大沼美佳、川井亘、倉本紀久子、白川克己、田中瑞男（敬称略）

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容（新）
上野山直樹	㈱コトブキタウンスケープ営業本部 〒105-0013 東京都港区浜松町1-22-5 Tel. 03-3435-4943 Fax 03-5404-7267
亀谷 清	(有)ナック建築事務所 〒693-0021 出雲市塩治町1287-10西本町光和ビル3F Tel&Faxは変更なし

広報・出版委員会

澤木 俊問	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康

事務局より

4. ホームページについて

JUDIホームページ <http://www.judi.gr.jp>

会員ページには、名簿・フォーラム・会員からのお知らせ・著作物データベース等があります。会員ページへのアクセスコードは事務局(judi@japan.email.ne.jp)にお問い合わせ下さい。

5. 寄贈図書

会員の大谷英人氏から著作の寄贈がありました。

「テキストまちづくり入門」

㈱若竹まちづくり研究所 発行

Tel. 088-834-0838 價格1,000円（税別）